

心の発見 現証編 1973年 三宝出版

高橋 信次 (たかはし しんじ)

幼少の頃から靈的体験を重ねるとともに、電子工学、物理、天文、医学などを学ぶ。コンピュータ機器の製作作業を嘗む。

前半の部分では著者の生い立ちから靈的現象が発現するまでを小説風に書いている。1969年に浅草の地下鉄駅の前にビルを立て、集会所とした。この集まりを「神理の会」とした。後半の部分はこの「神理の会」での実例をもとに構成されている。

文証・理証・現証を内在する正法

正しい中道の生活努力の積み重ねによって、得ることのできる正法には、文証と理証と現証の三つが具備されている。

文証は、永い歴史を通して、語られ伝えられ記録されてきた、不退転の証である。原始仏典、原始キリスト教のように、後世の学者やゴロ宗教家によって、書き改められたり、ときの権力者達の意志によって歪められたりしたものには、すでに文証の力はなく、心は失われている。

特に、多くの習慣や言葉で書き改められ、各国を経て伝えられてきたものの中には、間違いを犯してしまったもの、変化してしまったものが多い。

特に、仏教は、原始仏教、小乗仏教、大乗仏教などに造り変えられ、他力本願になつた姿を見れば、正しい文証とはいいくらい。

不变的なものは、人間によって変えることのできない神理であり、私達の心のなかに正しく生き続けている。

理証は、大自然と人間の在り方を実証し、文証によって示されているもの、といえる。

大自然の法理である、神の心の現われこそ、大自然の理証として現わされたものである。

現証は、文証、理証を体得して、生活行為のなかに現われてくるものである。心の安らぎ、人生の喜び、幸福な生活、調和された社会。人間は皆、神の子として兄弟だという自覚が生まれ、ユートピアが築かれて行く。

その過程には、実在界から現象界の人々に対して、不变的神理であることの現象が起こってくるものだ。

多くの人々によって、奇跡的な諸現象が現われ、病気や心の苦しみから、人々を救う現象が起こってくる。

しかも、法にもとづいて、地獄靈達に光明の道を教え、救う道をも明示する。

万人が救われる道、これこそ正法といえるのである。それは、あたかも太陽のように、慈愛に満ちて、万物万生を、偉大な力で暖かく包み込むように、神の子たる正しい道を示す。

人格者

謙虚な心で、自分の欠点を修正するためには、己にきびしく、人々に対しても寛容な心を持つことが大事だ。

人生においては、たとえ社会的地位が高くとも、他人を軽蔑し、自己保存の心の強い者達は人間の屑といえる。

人間は、人間の造り出した地位や名誉にうつつを抜かしてはならないのだ。

正しい自らの心が、それに値するだけの価値を認めたならば、地位や名誉も良いだろう。それが自己満足の虚栄心であるとしたら、受けるべきではない。

現代社会のように、人間の価値判断が経済力や学歴、家柄などといったものであつてはならない。両極端の考え方を捨て、常に自らの心と行為を反省し、包容力があり、そして智慧があり、勇気があり実行力のある人々、こうした人々こそ、本当に立派な人格者といえる。

他力信仰と自力

私達は、旧来の陋習を破り、自らの心を自覚させることが大切であり、実践が自らの心を豊かにする道である。

許すことも愛であり、本人の幸福のためには、きびしく指導することも愛だといえる。

すべて、個の生命が、人間として、生まれてきた目的と使命を自覚して、自らにきびしく、他人に寛容な心を持って、片よりのない生活をすることが必要だ。

自らの暴力によって他人を殺し、その冥福を祈ったところで、その念仏が相手を救うことができるのであろうか。

良心の苦しみは、他人には救えないのだ。

苦しみから解脱する道を聞いても、自らの心が納得しない限り、その苦しみから逃れることはできないものである。

つまり、自らの正道の実践なくして、他力本願の道は得られない。

地獄靈

地獄靈は、正しい心の在り方を知っている人には憑かないが、不調和な心の人々には、肉体までも支配するということもある。

人格が変わってしまうということは、その人の心の状態がすべて作用しているということを知るべきだ。

私達の心の針が指している状態が、地獄か極楽かということである。その状態が地獄に通じていれば、不調和な地獄靈に支配され、感情の起伏が激しくなるのも当然だ。それが、手術というきびしい環境に会い、多くの患者のなかには、自ら心を修正して、気分転換をする人もいるから、医術によって心まで治る者も出てくると

いえる。

つまり人間には、外科的手術と相まって、心の手術が必要である。

心が、正しい中道の判断ができて生活をしている場合、私達のほとんどは、本来の自分自身が支配している。だが心の受信装置が開かれている場合、心が正しい生活をしていないと、地獄靈に支配され、本来の性格と違った不調和な人格に変化してしまう。

良くいう気違いというのは、間違いなく地獄靈がその人の肉体意識を支配している姿である。

心のなかに、恨み、妬み、そしり、必要以上の我慢をするといった暗い想念を詰め込んでしまった者達が、支配されやすいのである。

私達は良く、胸騒ぎがするとか、何となくいろいろするとか、心のなかがざわざわするといった場合があるが、これは、必ず、不調和な心が働いたり、不調和な行為をしたときに起きるものである。

心のなかがざわめいて、何だか落ちつかない状態が続き、自分であって自分でないようなときは、間違いなく地獄靈がきているということを知らなくてはならない。正しい心の物差しで、自分の思ったこと、自分で行なったことを勇気を持って反省し、間違えてしまったことは心から神に詫びる。そうしたとき、初めて心の曇りは晴れ、神の光りに満たされる。そうしたときは、地獄靈は近づくことができない。地獄靈に支配されてしまうと、夜は眠れないで、昼はうとうとしている場合が多い。

この地上界の昼は、人々が活動しているため、非常に靈域が乱れてしまうが、夜になると眠ってしまうから、靈域は静まってしまう。

つまり、地獄靈達は、不調和な人々の心の支配はしやすい。

少なくとも、二晩も眠れないで、心のざわめきが起こったら、先に説明した反省をするとともに、医師に相談して、身心を休める指導を受けなくてはならない。憑依されている場合は、暗い静かな場所を好み、昼間はなるべくおとなしくしているようである。そして、夜になると、彼らが支配するため、元気をとりもどす場合が多い。

それも、弱々しい地獄靈、たとえば失恋などで精神異常を起こしている場合は、同じような類がその人を支配して悲しんでいる。

ところが、相手に対する憎しみが増大してくると、それと比例した憎しみの地獄靈がその人を支配して、今度は躁鬱病にしてしまうといった具合だ。

いずれにせよ、地獄靈は、その人の心の状態によって憑依するので、必ずしも持続的であるということはない。

これらの病人といえども、まともに返っていることもあるのだから、そのまともなときに、良く“正法”を教えることが大事であり、反省するように指導すれば救われる。

欠点の修正方法

他力信仰から脱皮して行くことは、非常にむずかしい。

苦楽の一切を善錆すれば、救われるという教えだけに、人間は腑抜けになってしまふからだ。他力で苦しみながらも救われ、欲望を満たす目的も果たせるということになれば、世のなかは皆平和で、闘争も破壊もないだろう。他力信仰では、人間は救われない。神は、太陽の熱光りのエネルギーを始めとして、万生万物を私達に与えている。この、自然の姿が、神の愛と慈悲の心の現われである。

苦しいときの神頼み、欲望を果たすための神頼みで、本当にその目的が果たされるものであろうか。私達は、子供の頃、何ごとも親を頼りにし、自分の欲しいものをねだったものだ。だが、それにも限界はあったはずだ。青年になり、働く能力があつても、親に甘えていれば何とかなると両親を頼り切っている、息子というものも考えてみることだ。

そういうのを、道楽息子という人もあるうし、怠け者の腑抜けというだろう。

こうした例も、両親に頼り切って生活しているということでは、他力ということだ。

人間は、自立心が大事だ。

一所懸命に働き、健康で平和な生活をしている子供達を見たら、両親は喜ぶだろう。喜ばせるということは、安心させるということにもなるし、親に孝行といえる。両親の慈愛によって育てられて成長してきた子供達が、親に孝行をするということは、報恩の行為であり、人間の道であり、感謝の心を現わすのは、当然のことである。

その行為を忘れて腑抜けになってしまっては、人生において何の修行になるだろうか。

信仰も同じことだ。

自らの力で生き、曇りのない正しい心で生活をしていれば、自然に、神の光りによって満たされ、幸福になれるのだし、それが私達人類の親神に対する報恩の行為ではないだろうか。

苦しみの原因是、人間自ら造り出している。

その苦しみの原因である心の雲りを払わないで、なぜ神の慈愛の光りを受けられるだろうか。

私達は目覚めなくてはならない。

自らの欠点は、正しい中道の心の物差しを、自らの心のなかにしっかりと刻み込んだとき、はっきりと悟れる。

丸い豊かな広い心に、歪みを造ったのも、狭い心を造ったのも、他の人ではない。自分自身であるということが解かったなら、欠点に対して、きびしく修正することが大事である。

極端な考え方や行ないは、必ず苦しみを造り出す。

人間が思うことも、行なうことも、同じ結果が現われてくるものであるから、しっかりと自分自身をみつめ、間違いを犯さないように努力すること、それがきびしい修行なのである。

そして、間違いを犯してしまったなら、なぜ犯したのかを良く反省してみると

である。

その結果は、ほとんどが、自己保存、自我我欲に帰する。

ある者達が極端な考え方や行為に走っている、誤っていることを知っても、人前だと、正しい中道の判断をしても心のなかに秘めて自分の立場を守ろうとする。このような人々も自己保存だ。

自らの欲望と、中道を外れた一切の執着を捨てようとする。毎日の生活で八正道を素直に実践し、こだわりから離れ、心は豊かで広く、神の子としての自覚に目覚めようとする。そうした人々こそ真の智者といえる。

そうした人々は、自らにきびしく、他人に慈悲深く寛容な心の持主である。

私達もこのような人間になりたいものだ。否、ならなくてはならないのである。

万物の靈長として、この地上界にユートピアを築く大目的を果たすためには、この実行をしなくてはならないのである。

その第一歩には、自らの欠点と業の修正が大事だ。

また、病弱だからとか貧乏人だからとか、地位がない、肉体欠陥者だ、不義の生まれだ、人格が違うとかいったような理由が、心のなかに存在している人々は、心まで病弱で、貧しく、低級で、愛情欠陥者で、卑しく、大きなお荷物を背負っている哀れな人々である。

このような人々は、自ら敗北の人生を歩んでいる者達だ。

神は、すべてに平等な慈悲と愛の光明を万遍なく与えているのである。

たとえ、外見的な問題や人間が造り出した不平等な段階で試練に逢っても、心まで失ってはならない。

人間は、自ら望み、自ら造り出したいろいろな不調和な現象の泥沼のなかから、自らはい上がるための努力と実践行動が伴ったとき、それはすでに、一切のとらわれから、悲しみや苦しみから解放されるときといえる。

欠点の修正は、自らの努力によって苦しみから解脱して行く過程であり、八正道の実践は、自らの心を悟りに導く最高の道である。

天国の道には、人それぞれの道がある。

この地上界から直接八正道の近道を行く者と、地上界から行くことができないで、きびしい地獄界を経て遠回りをして行く者もある。

八正道は、人生航路における心の重い荷物を下ろし、安らぎを得て、光明の道を歩くようなものだ。そのときあなたは、人々からも愛の手を差し伸べられ、信頼されることであろう。

しかし、極端な心と行ないで生きる人々は、苦しみと悲しみの大きな荷物をかついで喘ぎ喘ぎ山道を登るようなものだ。いつ谷底に落ちるか判らないだろう。

誰からも協力を得られないで、裏切られ、自ら孤独な人生を送ることになるであろう。

権力の座に上がったときから、人々は、苦しみ始める。かつての業の、修行をしなければならないからである。

心ない人間とは、まことに哀れな者である。

この世を去るときには、自らの、嘘のつけない善なる神の心が、人生で犯した自

らの罪をきびしく裁くのである。

信じる信じないにかかわらず、私達は、人生航路の終焉が一秒一秒近づいているということを、忘れてはならない。

美しい花が人の眼を慰めるのも束の間、やがては散って行くのだ。

眼に映る一切の諸現象は、所詮、人間にとっては一場の夢である。

人生とは無常なものである。

しかし、私達が、心に八正道の花を咲かせていれば、永遠に散ることのない、美しい平和な安らぎのある世界という実りが持続されて行くのである。